

大石 鈴

第二次世界大戦下のプロパガンダ映画が大衆に与えた影響

要旨

本研究は、戦時下のプロパガンダ映画において観客心理の深くまでコントロールするために必要な条件について掘り下げ、それがどのように作用したのかを考察する。また米国、ドイツ、日本のプロパガンダ映画を比較し、国ごとの特徴に注目しながら、当時の戦況や社会的背景との関連性について考察を進める。そして、現代の人々がプロパガンダに惑わされないために、メディアのもつ影響力について批判的に捉えることを本研究の目的とする。

作品の分析では、米国、ドイツ、日本の三か国からそれぞれ二作品を選定し、物語要素の強いものとドキュメンタリー要素の強いものを各国一作ずつ取り上げた。

分析の結果、第二次世界大戦下のプロパガンダ映画が戦略的な手段として機能していた背景には、心理的メカニズムを駆使した映像表現と国民的キャラクターの効果的な起用があったことがわかった。さらに、当時の社会的、政治的状況は映画制作の方向性に大きく影響を与えていたことが明らかになった。当時の作品の一つ一つには、国家の思惑や強いメッセージが込められており、物語構造や視覚的な象徴を通じて国民に伝達していた。